松岡勲の映画 or 読書案内（６）

渡辺清の戦争体験を読む(１)
『海の城　海軍少年兵の手記』（角川新書）

渡辺清の代表作『海の城　海軍少年兵の手記』『戦艦武蔵の最後』『私の天皇観』『砕かれた神　ある復員兵の手記』をすでに読んでいて、私のホームページに感想を掲載している。教育サイバーネット　https://www.jca.apc.org/~isao_m/yomu_130723_02.html

最近、角川新書でそのうちの『海の城』『戦艦武蔵の最後』が再版された。どちらも朝日選書版での鶴見俊輔氏の深い含蓄のある解説が採録されているが、新しく福間良明氏（前者の本）及び一ノ瀬俊也氏（後者の本）の解説が掲載されている。どちらも再読した。

今回は『海の城　海軍少年兵の手記』を紹介する。

新しい解説は福間良明「『天皇への問い』の起源　『海上の城塞』の閉鎖性と暴力」で、現代からの視点で読み直したものだ。あらためて本文を読み直して強く感じたことは、巨大な戦艦のなかで（陸軍の「内務班」と同様の）私的制裁が繰り返されることのすさまじさだ。それも海上に浮かぶ戦艦の閉鎖性、閉じ込められた空間の中で振るわれる暴力の恐怖だ。

18 歳の主人公北野信次（著者渡辺清をモデルとしている）は、トラック島基地で、戦艦「播磨」（このモデルは「武蔵」）に乗りこむ。同期の上等水兵６人の若い兵隊としての共同の主人公の視点から戦闘に入るまでの軍艦の日常生活が描かれる。分隊内（陸軍でいえば「内務班」に相当する）では制裁が熾烈を極め、その恐怖、肉体的・精神的苦痛が描かれる。この小説で繰り返し出てくるのは「甲板行列」である。分隊の下士官、兵長らが若い兵隊に、渡し３尺ぐらいの樫の棍棒（これを「軍人精神注入棒」と言った)、そのほか木刀、グランジパイプ（消防蛇管の筒先)、チェーン、ストッパー（わざと海水につけて固くした太い麻縄）などを使って行われる暴力である。(「甲板整列というのは、だからいってみれば軍艦の精神であり、教義であり、紀律であり、矜恃であり、意志であり、感情であり、要するに軍艦を内側から守るための一切である。」）この中で江南一等水兵は殴り殺され、山岸上等水兵は休暇帰省中に自殺して艦に戻らなかった。このほかにさまざまな制裁（「不動の姿勢、敬礼、整列、かけ足、罵倒、殴打、うぐいすの谷渡り、食卓のおみこし、ミンミン蝉、電気風呂など卑劣きわまる罰直だ。」）が日常化していたのが海軍の実態であった。とても陸軍より海軍が「近代的」とは思われない。

最後の場面では、山岸上等水兵の自殺にからんでの制裁で我慢の極限を越えた北野はついに上官への反抗にいたる。この場面には、実際にはできなかった「抵抗」への著者の歯噛みする思いがこめられていると思った。「あとがき」には、「私は十六歳のとき、自ら志願して戦争に参加したひとりであるが、それだけに戦後はその無知と屈辱と罪責にさいなまれ、(中略）戦争は私にとって何だったのか、どんな傷痕を残したのか・・私はもう一度、過去の自分を赤裸々に再現してみることで、主体的にとらえなおしてみようと思った。」とある。新書版で 458 ページに及ぶ力作だ。

以前に読んだ時には、戦時に行われた「暴力」を単なるリアリティだけで読んだが、あらためて小説として読み直すと、戦時に戦艦の中で生きた若き少年兵の心の葛藤、煩悶等が強く描かれていて、また若者たちに死をもたらした「天皇制」への根源的批判のある、実にいい作品だった。

次回はこの後に書かれた『戦艦武蔵の最後』を紹介する。